緑爽会報　NO．105
‘12年　2月22日
発　行
(社)日本山岳会緑爽会
TEL　03-3261-4433
事務局
松本恒廣　樋口公臣
夏原寿一
近藤　緑　川口章子
横山　隆　渡部温子

［新年山行報告］

民権の森―七国山（2万5千＝原町田）

山口　悠紀子

二〇〇七年から緑爽会の新年山行をお手伝いしている。六年目ともなると、歩くコースより、打ち上げに良い飲食店があるかどうか、気になってくる。五月の土曜日、家にいる日は聴いている［永六輔土曜ワイド　TBS］で、たどたどしい日本語の女性と永さんの話を耳にした。町田駅から三分の、カンボジア料理店の電話番号をメモした。六月、一二月と通い、今年の新年会の会場と決めた。

一月一四日（土）、小田急線鶴川駅集合。西口バス広場0番乗り場からバスに乗る。綾部下車。信号を二本渡り、五分位で、町田市立「自由民権資料館」に着く。予約しておいたので、資料を貰い、学芸員から、約四〇分位の説明を受けた。町田中心で五日市憲法などの評価は低かった。

南西に四〇分位歩いて、小山の民権の森に登る。町田自由民権の中心者、議員や知事にもなった石坂昌孝の顕彰碑が建っている。資産家でもあった石坂は、井戸塀で、この小山だけを残し、両側のダリア園になっている土地など、すべての資産を失った。

北村透谷と結婚し一女をもうけた長女美那は、透谷の死後、子どもを北村家に預け、アメリカ留学し、帰国後英語教師となる。一九四二年、娘の堀越英子家で死去（七六歳五ヶ月）。

民権の森を下り、鎌倉古遺跡の残る七国山（峠）に向う。新田義貞の鎌倉攻め（一三三〇年代）にここを通り、切り通しに井戸を掘った跡である。東側の高みに三等三角点あり。薬師寺で初詣でし、巨大な民権遺跡を見て、バスで町田に出た。

アンコール・トムはランチタイムの食事は八八〇円が中心。カンボジアのソフトビール、ラオスの四五度焼酎などもある。

写真撮影　梅本知榮子

［2月例会］

2月16日（木）、宮下啓三会員のアルプス談義最終章、**「増えた山の名、消えた山の名―意外な土地に存在していた山岳密集地域」**の講演が開催され、緑爽会員のほか、宮下さんの友人、遠くは甲信越からの参加者もあって盛会だった。いつものように、資料を持参されたが、地図上の赤・青・黄色の線引きが講師自ら一枚ずつ作製されているのを見て、誠実なお人柄に改めて感じ入った。終了後に託された原稿は「緑爽会報」に次号から掲載する予定。

●緑爽会―これからの予定

［4月山行］

関東の名山が一望できる仙元山・和紙の里

4月15日（日）

集合　東部東上線池袋駅発8時10分小川町行電車内

又は小川町駅改札口9時30分　費用約1600円（池袋起算）

係　横山　隆　☎03－3704－1687（夜間のみ）

［5月総会］日程未定

［6月自然保護全国集会支援事業］

6月29日（金）～7月1日（日）の日程で開催される自然保護全国集会のうち、緑爽会は委員会と共催でプレスタディ 東日本大震災被災地**「慰霊と支援の旅」**を計画している。29日朝、東京を発って宮城県から福島県を視察。猪苗代に宿泊、支援の夕べを開催、翌30日には片品村戸倉の会場で午後からの「尾瀬を考える」集会、支部交流会に参加。7月1日は半日、尾瀬を散策するか、谷川岳方面にバスを回すか検討中。係 近藤 03-3395-0326

［緑爽会‘12．3月山行］

浅間尾根を歩く

［期　日］　3月18日（日）日帰り（雨天中止）

［集　合］　武蔵五日市改札口　8時50分

9時発の「都民の森行き」バスに乗ります。

（1番乗り場）

＊JR立川発 → 武蔵五日市着

7：57 → 8：34

8：11 → 8：48（ホリデー快速あきがわ1号、新宿発7：44　11番線）

［コース］　武蔵五日市駅⇒バス50分⇒浅間尾根登山口→1時間→数馬分岐→40分→一本松→50分→人里峠→30分→浅間嶺→1時間20分→時坂峠→30分→払沢の滝入口バス停⇒バス30分⇒武蔵五日市駅

［歩行時間］　4時間40分

［地図］　猪丸、五日市（2万5千）

［係］　松本恒廣

［申込み］上記　松本　TEL03-3362-2892　Fax 左に同じ

今回は、昨年3月に計画されていながら震災のため中止となった「浅間尾根を歩く」の再登場です。浅間尾根は、南・北秋川を分けている伸びやかな尾根です。登山口から尾根までは、300m程の登りですが、そこからは上り下りの少ない尾根道を浅間嶺に至り、時坂峠を経て払沢の滝入口バス停に下ります。

ブータンの人と山 その②

山川 陽一

ブータンの山岳

ネパールと違って、ブータンは登山やトレッキングの歴史が浅い。観光政策の一環で、国でトレッキングルートを選定して、外国人のトレッカーを呼び込む体制が整えられたのも近年の話である。

たとえば、エベレスト街道を例に取れば、近年は街道沿いの要所要所にロッジがあって、テント泊なしでカラバタールまで行ってくることができる。登山やトレッキングをサポートする登山案内人のシェルパや荷物運びのポーター、ヤクなどの体制も万全で、いざというときの救急体制としてヘリの出動も可能であるから、中高年でも安心して登山やトレッキングに参加できるようになった。

今回われわれがめざしたスノーマントレックと呼ばれるこのルートは、ブータンの北辺チベットとの国境線に通じる主としてヤクの放牧を生業としている現地住民の生活道を辿るものである。登山としての技術的困難性を求められるものは何もないが、道中は標高５０００メートルを越える峠数箇所を含む４０００メートル以上の高山帯の連続であること、正確な地図が存在しない事、コースに精通した案内人も求め難いこと、いざというときのレスキュー体制がまったくない事などが問題であった。

２００９年に訪ねたチョモラリ・ジチュダケのトレッキングは、このスノーマントレック西側の入口に当たるコースで、パロからパロ川をさかのぼって標高４０００メートルのチョモラリベースキャンプまでの３０キロを歩く。ブータントレッキングの定番として人気を博し、多くのツアーが組まれているから、受け入れ態勢もしっかりしており、安心して参加できる。日本からの旅行期間２週間・山中１０日ほどの行程になるが、ブータン流の山歩きのスタイルやブータンの山岳の状況、街や人の様子がひと通り体験でき、ブータン入門編としては最適であった。

チョモラリベースキャンプにて

こんな準備を経て臨んだ２０１０年の本番の旅は、私にとって忘れ得ないものになった。

当初、春の入山を考えたが、雪の状況から日程を秋に変更。参加者は私を含めて４名、日本のエージェントはヒマラヤ観光にお願いした。

日が迫ってもこのコースに精通した現地ガイドがなかなか見つからないことや、豪雨で道中の橋が流失して復旧のメドがつかない事などから、実施が危ぶまれたが、これらをクリアして、９月14日出発、10月９日帰国、前後26日間の長旅であった。

コースは、前年歩いているパロからのルートをカットして、途中プナカから入山して、ラヤ、タンザ経由ニカチュに下る20日の山歩きである。

この年は長雨が続き、前半は連日雨中の行軍になった。ガイド、キッチンボーイ、馬方やヤク使いなどの体制やサービスの方式はネパールと大差ないが、荷物の運搬には人力（ポーター）は使わず、すべて現地調達の馬かヤク（４０００メートル以上）であることが大きな違いである。

スノーマントレックと呼ばれるように、このコースはブータンヒマラヤの高峰や氷河湖の眺望を存分に満喫できる。ブータンでは現在すべての高峰は神宿る峰として登山禁止措置が取られている。いまや、世界の８０００メートル峰14座はすべて登頂され、７０００メートル峰も登りつくされて、世界で唯一残された未踏の高峰がブータンのカンガルブンスム（７５４１ｍ）である。10月２日、このコースで唯一カンガルブンスムが眺望できるといわれる５３００メートルのリンチェンゼーラ峠の上に立ったとき、谷を隔てた台形の雪嶺の奥にカンガルブンスムの雄姿を見ることができたときは大感激だった。

未踏の７０００メートル峰カンガルブンスム

等高線の入った地図が存在せず、唯一手元にあるのは、カトマンドウにある会社が発行した39万分の１のブータン全図というのだからお粗末なものだったが、突然思ってもみなかった川の流れや無名峰が現れたり、半ばあきらめていたカンガルブンスムの眺望ができたりと、未知の世界に分け入った昔の遠征隊的気分に浸れたのは幸せなことであった。

景観で心に残っているのはタンザの村を過ぎる頃から次々に現れる氷河と、ターコイズ色の水をたたえた数々の氷河湖群である。ネパールやチベットでは見ることができないこの光景は圧巻だった。

これからのブータン

ブータン政府は、ＧＮＨの旗印の下で、市場経済最優先の先進諸国になびかない独自政策を打ち出しているが、一方観光客の大々的な誘致を掲げ、都市化が急速に進みつつある現実を見ると、いつまで今日の姿が保たれるか、大いに心配である。

観光客10万人（現在４万人）を目指し、首都テンプーにできた7階建てのショッピングモール、２０１２年から観光客の滞在料金ひとり１日２５０ドル（春、秋）と２００ドル（夏、冬）に値上げ決定などのニュースを聞く昨近である。日本のツアー会社も、ブームにあやかろうといっせいにブータン旅行の企画をはじめた。

余計な心配かもしれないが、賢明なブータンが先進国の後追いをしない事を願うだけである。

●編集後記 寒い寒いと思っていたら、珍しく大風邪をひいて、会報発行が危ぶまれた。体調を崩すと先ず気力の減退がくる。何とか一ふんばりしなくてはと思いつつ、ご迷惑をかけた皆さまにお詫び申し上げる次第。今後もよろしく。（近藤）